會員通信

東京で北海道を考える

古後順子

いくぶん武蔵野の面影を残していた東京のはずれの久米川も、新青梅街道ができて便利になるにしたがって地価の値上がりとともに、武蔵野らしさが日増しに消えていきました。借景としてすばらしかった前横の松と雑木の林も、いまでは駐車場というなんとも殺風景な景色と化し、コンクリートの箱を並べたような団地がそちこちにできて、世帯数に不釣合いなほんの申しわけ程度の草木が植えられているだけです。

子供の遊び場は、コンクリートの椅子と動物が多少お相手をつとめてくれているだけで、お山の大将われ一人といって遊んだ土の山も、ころんだらひざ小僧をすりむきそうな、これまたコンクリート。海賊船のマストよろしく、よじ登った木のぼり用の木もなく、〃トンボ釣り今日はどこまで行ったやら〃などという句が、いまの子供が大きくなったとき理解できるのかしらと思うほど、原ッパや林（子供の頃には、南洋のジャングルのように思えた）がなくなってしまいました。

東京の真ん中とはいえ、緑がたくさんに見られた番町界隈も、ここ二、三年のうちに、遅すぎたと思われるビルが建ち並びはじめました。ビルができれば人が集まり、同時に車が押し寄せ、ビルの谷間はご多分にもれず排気ガスのただよう巷と化して、夕方ともなると喉が痛み、呼吸が苦しくなり、心臓が半分に縮まってしまったような感じさえします。

桜の花は白っぽく、はじらった乙女の頬のようなピンク色には咲いてくれません。真夏に紅葉ならぬ菊葉が雨のように降り、秋に美しい紅葉を見せるはずの桜の葉は、オバケの手のごとくダラリとたれ下がり、ちょっと本の間にはさみ込みたいような、立派な銀杏の黄葉をみることはできなくなりました。

先日、はじめて九州の秋に接し、東京の紅葉のみすぼらしさを、いやというほど感じました。残念ながら、私はまだ北海道の春夏秋冬を見たことがなく、よく写真で見るエルムの林はどんな紅葉をするのかナと思っても、想像さえできぬ有様で、自然保護協会の名簿に名を連ねるには、なんとも恥しいかぎりの存在です。

しかしそれゆえに、子供の頃を過ごした逗子や、鎌倉の自然破壊のあまりのひどさにおどろき、私が北海道の地をおとずれたとき、逗子・鎌倉のあのハゲ頭のような、北海道の山をみせられるのにしのびなく、きびしい自然で長い間こばみつづけた北海道も、やがて間近い日に営利事業の犠牲となって厚い緑の衣をはぎとられるのではないかと、心配でなりません。

新幹線が五時間ほどで、東京の私達をそちらに運び込む日も近いと聞くにつけ、そのスピードに追い越されないうちに、自然は人とともに美しく活かされなければならないということをすべての人の心に植えつけなければならないと思います。東京の昨今のように、人の心をなごめる緑は抜かれ、その代わりにアルミの楯で身をかためた人の林ができて、林の厚みが増してゆくのを見るにつけ、これが本当の林であったならどんなにかすばらしいことかと思います。

伝説を聞くような、北海道の本当のお話を実際に、この目で確かめる日のくるのを春を待つような気持で楽しみにしております。

（東京都）

遠浅の一年

斎藤真理子

遠浅というところは、名前に反して、海もなければ大きな湖もありません。大昔、海であり、遠浅であったという人もあれば、アイヌがトアサと呼んでいたので、あて字として遠浅と呼ぶようになったという人もあって、その語源は明らかではありません。

牛の牧場地帯としては、世界的に名のあるところで、その自然の美しさはすばらしいものがあります。

。

遠浅の春は遅い。四〇センチ以上の深さまでコチコチに凍った土が掘れるようになるのは、五月近くなってからです。しかし花が咲き出してからは、とても早いようです。野生スズランの群落と、カタクリの群落とはそれぞれすばらしい景観であって、

神がここまで自然の美しさを与えてくれて、それを素直に受けとめる能力を人間に与えてくれたことを感謝せずにはいられません。また、春の山菜採りの楽しさも格別で、フキノトウ、タランボの芽、フキ、アイヌネギ、ウド、ワラビ、ササタケノコなど、じつに豊富です。ミルクの白さと山菜の緑、目も心も楽しませてくれる遠浅ならではのオヤツです。

しかし実際に、農業にたずさわっている人たちの土との戦いは、すさまじいものがあります。そのうえ、ちょっと掘ると豆粒大の火山岩で、肥料の効いた作物と効かなかった作物では、一目瞭然です。自然の美しさのかげで、自然と戦っていく底力が遠浅の人たちには秘められているのです。

春から夏にかけては、小鳥たちの天国です。朝早くから小鳥たちが合唱をはじめるので、うるさくて寝ていられないほどです。「うるさーい」とどなろうと思って窓を開けると、一面霧がかかって木立ちや道がボーッとかすんで見え、永遠のかなたに吸い込まれそうになります。

。

夏は、じつに短いです。緑が多いわりに、夏の風物のひとつである、蟬の声があまり多くないのは不思議です。草原が多く、大きな木が少ないからでしょうか。

しかし夏の間には、いろんな動物に出くわします。リスが庭さきに遊びにきたり、キツネが車の前に飛び出したり、キジが優雅な長い尾をふりふり、舗装道路を横切ったりします。そしていつのまにか赤トンボが乱舞し、秋がやってきます。

。

遠浅の秋は長い。そして、おおいに食欲を満たしてくれます。トーキビ、カボチャ、ジャガイモの味は格別です。また美しい紅葉が、目を楽しませてくれます。夜空に輝く星もすばらしいです。ルソーの「自然に帰れ」ということばの意味の、重さを考えさせられます。

人は自然を破壊し、自分の欲望のためにだけ文化を発展させた結果、何を得たのでしょうか？　結局は己が心のうちの自然さ素朴さ、素直さ、を失ってしまい、人間同志の信頼関係がうすれ、お互いにかくし合うみじめな生活になっているのだと思います。ですからもう一度、自然に帰るべきでしょう。環境としての自然の問題だけでなく、さらには、人間の心の自然さをとりもどすことにも、注意が向けられることをねがっています。

。

遠浅の冬は「さむい」。雪はほとんど降りません。ホーキではくことは何回かありますが、雪カキ棒を使うことはひと冬に一度あるかないかです。風は刺すようで、空気中の水分が凍るのが外燈の光の中で、空気がピカピカ光って見えます。

しかし冬は冬で、自然の美しさを味わうことができます。霧氷の美しさは美事です。葉の落ちた木の枝や、幹についた水分が急激に冷やされて、まっ白な氷になるのでしょうか。小さな木も大きな木も、小枝の一本一本までまっ白になっています。あかあかとストーブをたいた部屋で、熱い朝食のミソ汁をフウフウいって飲みながら、窓越しにながめる霧氷の美しさ、詩人は、この美しさをどのようにうたいあげるのでしょうか。

。

このように遠浅の自然を紹介してまいりますと、遠浅を知らない方は遠浅というのは、ものすごい山奥みたいに想像するかもしれません。たしかに交通は不便なところですが、距離的には札幌より七〇分、千才より二〇分のところなのです。けっして山奥ではありません。しかし、じつに平和な田舎であることには変わりありません。

ところが、閉鎖的な面のない田舎なのです。私自身、東京のまん中で生活し、いきなりこの田舎に来て不便を感じることもありますが、むしろ都会的なコセコセした思いが洗い流されていくようで、うれしく思うのです。必要なときには、町に出かけて買物をしたりする。しかし、生活の本拠地は自然の美しい田舎に置く生活、じつに理想的な生活であると思います。都会的文明にあこがれる必要はないでしょう。もっと大切なものを見つめて、生きたいと思うのです。

（勇払郡早来町）

札幌―大阪―紀見峠

吉田　勝
吉田蒼子

山間の小さな駅に降りると、初雪が舞っていた。ここは大阪と紀州を分ける和泉山脈のふところ、紀見峠駅である。吉野杉で有名な紀の国を望む峠らしく、スギ、ヒノキのみごとな林が目に飛び込んでくる。その緑をひきたたせるように、色あせた紅葉が枯枝にしがみついてカサカサと音をたてている。

一年前、住み慣れた札幌から大阪へ越して来ておどろいた。灰色の空、かすかな星、空気は悪く、来阪したはじめの頃は私達二

人ともゼンソク気味だった。また、水道の水はしばしば異臭をふくんでいて、お茶も飲めなくなった。いたたまれない私達にくらべて、土地の人のゆう然としているのを見、人間の慣れの恐ろしさを思った。

これは大変とばかりに、山の中へ引っ越した。ここへ来て青い空、おいしい空気にふれ、臭いも味もない谷の清水を飲んでいる。昔はどこでも当然であったこの空気、水、青空が都会生活に慣れたものにはことさらおいしく、うれしい。

紀見峠駅からわが家までは段々になった田んぼぞいの登山道で、夏にはホタルが飛交っている。やがて道は沼の端を通り、小さな杉林を抜けると急に視野が開け、村の峠にくる。天気のよい日にはここから、日本でただ一つの女人禁制の山・山上ケ岳が、頂に雪を置いて白く光っているのが望まれる。足元から沓掛村がはじまり、山にかこまれた段々畑や、田んぼの中に二十数軒の家が点在している。一番低いところを国道が走り、その手前に小学校、幼稚園のプールが見下ろせる。峠から手のとどく赤い屋根が、わが家である。

村には夕げの煙がちらほら立登り、なんともものどかである。たまに昼間家に休んでいると、近所の方がとりたての野菜を差し入れに来てくれる。休日にはリュックを背負った若者達が、幾組も家の前を通って行く。まことに田舎の生活は楽しい。

しかし来年には、国道の向うの山々は切りとられ、大きな団地ができるという。わが家への山道も向う三年間、ダンプ道が横断することになるらしい。せっかく親しんだ緑の山嶺は、ホタルが見れなくなる。田舎に住んでいる人達は、この田舎の自然の価値の高さを実感として持ってないらしい。村から大阪へ就職した若い人達は、わざわざ大阪の街中に居を求めることがあるという。

この附近の山々は、大阪の人達のやすらぎの場所である。私達はここに居を定め毎日、自然を満喫している。村の人も山に木を植え、田や畑を作り、自然を享受し、そのお祭りさえもっている。しかし、あまりに自然が豊富なためか、積極的に保護しようという意識が薄いように感じられる。これは私達が、この村にはいってからまだ日が浅いためかもしれない。

しかし、自然保護は地元からとよくいわれている。私達は以上の見方から、まず第一に、村の人達と一緒にこの村の自然を守っていきたいと考えている。

（和歌山県）

函館山のこと

田尻聡子

宇野浩二氏が、かつて「函館に緑の函館山と、啄木の遺跡がなければふたたび訪う街ではない」と語られたとか……。函館を蝦夷地の古都と自認する市民にとって、これはいささかプライドにかかわる言葉であります。

ところが皮肉なことに、函館が目下大いに売りこんでいる観光商品は、まぎれもなきこの啄木と函館山であり、とくに啄木は知らなくとも函館山があるから函館を訪れる観光客は年々増え、夜景は世界三大夜景の一つと宣伝され今日、函館山は観光都市・函館の顔として人々に膾炙している。

しかし、残念なことはいまだに函館山は観光客が俯瞰、遠望するためにある山であって、観光産業に熱を入れる「自治体」自体、函館山の見どころは夜景としか理解していないのが現状です。いまさらここに喋にするまでもなく、函館山からの景観はじつにすばらしい、の一言につきます。

夜景はいわずもがな……、ぬけるように明るい津軽の洋上をゆくオレンジのフェリーボート、色彩豊かに広がる家並み、坂道と石だたみ、トンガリ帽子の教会、エキゾチズムとロマンのムードが爽かな潮風にとけてゆく、田辺三重松画伯の筆になるあの一幅の絵なのです。

§

では市民にとって、函館山とは一体なんなのだろう。野鳥の天国、植物の宝庫、史跡と伝説の山などなど、見る角度により山は多様に変貌する。しかし二五万市民おしなべていえることは、山は憩いと散索の恰好なわが家の庭であることに違いはない。中にはただ単に、眺めるだけの観光客なんぞにわが屋敷内を土足でけがしてほしくない……と、さえ思う市民も多い。

さて函館山には、蝦夷の歴史の夜明けとともに様々の人が訪れた。まず義経、弁慶をはじめとして日蓮の直弟子日持上人も函館山ゆかりの高僧であり、コシャマインの酋長も山の一角に住んでいたとか、小さな砦すなわちハクチャシが函館の語源とか、幾多の伝説にいろどられている。幕末に至れば人脈往来頓に繁く、三十三番観音の霊場も、当時、高田屋嘉兵衛などが開いたとか、伊能忠敬が日本地図作製のため実測の

第一歩を踏んだのも、じつにここ函館山からである。

そして東亜植物学の父と称せられるマキシモヴッチ氏の偉大な業績も、この緑濃い函館山の美しい舞台がなかったならその半ばにもおよばずしておわったやも知れず、将又チョーノスキー草は永遠に花ひらくチャンスも訪れはしなかったにちがいない。

§

マキシモヴッチ氏は一八二七年、モスクワ近くで生まれた植物学者です。日本を訪れる前、アムール地方の探険旅行をし、アムール地方植物誌を公刊し、その名著に対しデミードフ賞金を得たのでふたたびアムールを旅行中、日本開港を耳にし、急に日本植物研究を思い立ち一八六〇年万延元年九月、ウラジオを出港函館に上陸したといわれています。

当時、日本は井伊大老が桜田門外に暗殺される世情騒然たる時代、尊王攘夷の嵐吹きすさぶ維新の前夜でした。したがって外国人は、日本国内を自由に旅行することあたわず、開港地より一〇里以内に制限されていました。これは植物の調査研究を目的とするマ氏にとって、致命的な出来事であったでしょう。

そのときはからずも、マ氏の従僕兼風呂番として雇われたのが須川長之助という、当時十九才の朴訥な青年です。マ氏がたまたま長之助に附近の植物の名を尋ねたところ、かなり良く知っているのを歓び早速、長之助を函館山に同行し、ここではじめて長之助に植物採集、標本作りなどの教育をはじめたわけです。道南植物の権威者・宗像先生の言葉をかりると

「函館山は日当りの好い台地もあれば、雑木林濡地帯もあり、ガケ地、石ころの多いところ、海岸の砂地まである、コンパクトに様々の環境要素があり、当然それぞれの環境に適した植物も成育している、まさに新人教育には最適の地であった」とのこと。ここでマ氏と長之助は人種、国境、言語、思想、主従などいう諸々の厚い壁をのりこえ、学問に対するひたすらの情熱と、人間としての深い友情を培っていったことでしょう。

マキシモヴッチ氏の函館滞在は僅か一年二カ月にすぎませんでしたが、その後、長之助はマ氏の文字どおり手となり足ともなって、日本各地の山野を跋渉し植物採集に努め、マ氏の帰国後も氏の依頼により、氏の没するまであらゆる苦難を克服してマ氏の日本植物研究の偉業を助けたわけです。マキシモヴッチ氏も長之助の労に酬い、六種の植物に「チョーノスキー」の名を冠し、その栄誉をいまに伝えております。

"Что Это Цветок?"
"Что Это Трава?"
"Как Это Называется?"

眼下に函館港を眺みながら、あちこちの草むらから二人の囁きが、そこはかとなく聞こえてくる……そんな函館山が私は大好きなのです。

（函館市）

大雪道路アンケートに示された一般会員の熱意を評価する

高畑　滋

最近の自然保護運動が一部の有識者だけではなく、広い住民運動のかたちをとっていることは、指摘するまでもないことだと思います。また、日常の生活とは縁遠いような自然の保護を、毎日接している公害の問題と同質のものであるととらえる人達も、ふえてきています。自然保護運動の曲がり角といわれるのは、このへんの状況によるのだと思います。

最近増加しつつある協会員の意識には、一昔前のサロン風な集まりといった感じはありません。それが今度のアンケート調査にも、よくあらわれていました。協会員ひとりひとりは、真剣に自然の問題を考えていました。このような状況を理事会では、じゅうぶんにつかんでいたのでしょうか。

自然保護協会が、まだ少人数で気心が知れた仲間であり、かかえている問題もそれほど深刻でなかったうちは組織上の配慮も、あまり必要がなかったものと思われます。質的にも、量的にも、破かいが急速にすすんでいる現在では、会員一人一人がそれぞれ苦境にたたされているのが現状です。サロン風の「のどかさ」は消え、「苦悩する集団」ともいえそうです。会の性格に応じて、組織も流動的に体質改善をしていく時期だと思います。

有力者を通じて知事に配慮をしてもらっていた頃とは、状況が変わりました。一人一人の会員の力は弱くても、直接問題を会員の肩におろさなければなりません。そのために会員も増えましたし、全国自然保護連合という、横のつながりもできました。なにとぞアンケートに示された、一般会員のエネルギーの強さをじゅうぶんに発揮できるよう、協会のありかたについてもよく検討して下さるようおねがいします。

（札幌市）

大雪縦貫道路建設に対するアンケートの結果について

西村　格

私達会員有志は、過日「大雪縦貫道路建設」に対して、会員の皆様がどのようにお考えかお聞かせいただきましたが、多数のご回答がいただけたことに対して感謝しております。ここでその結果の概要と二、三考えさせられた点を報告し、お礼に換えさせていただきます。

アンケートの結果（回答数二五九人、回答率五九・〇％）

「忠別―清水線」の建設についてどのようにお考えですか

Ⅰ　建設賛成（六・六％　一七人）

1　道路建設は住民の福祉につながり、自然保護に優先する。（七人）

2　観光価値が増すので、多少の自然破壊はやむをえない。（三人）

3　道、開発庁でも自然を破壊せずに行なうといっているので問題はない。（十四人）

賛成意見の特徴は、上川―十勝を結ぶ重要な産業開発基幹線であり、自然保護は開発との調和を考えるべきであり、Ⅰの3のごとく、自然破壊せず行なうとされている以上、問題はないとする意見でした。

Ⅱ　建設反対（七五・六％　一九六人）

1　大雪山系の場合特別保護地区には、これ以上車道を建設すべきではない。（多量の観光客が入ることが自然破壊につながる）（一六六人）

2　現状の技術、知識では自然破壊がいちじるしく当分中止すべきである。（四七人）

3　車道の建設は低標高の地帯までにとどめ、通り抜けられる道路は建設すべきではない。（六一人）

（設問が不備で、多数の方よりおしかりを受けましたが、Ⅱの1には大雪国立公園内の山岳道路は、どのようなものでもこれ以上延長すべきではない、とするご意見五二名がふくまれています）。

反対意見は、非常に多数で一言で特徴をあげることは困難ですが、おおむねつぎのとおりです。

自然保護は一部地域内の限定した問題として処理すべきではなく、全国的な視野に立って、各地の自然保護と開発のバランスを考えるべきである。自然研究の場として全国的あるいは世界的にみても、大雪の国立公園は重要であり、一時代の観光、あるいは産業的価値のみから問題は論じられない。

現時点で考えても、各地のあるいは銀泉台・旭岳・黒岳の自然破壊をみれば、道路建設による損失が、開発によって得られる利益よりも、あまりにも大きすぎるとする意見が大勢を占めておりました。また自然に接するには、それだけの努力が必要である。特別保護区は、周辺の林道をふくめて車道を規制しなければならない。観光ブームを利用して、商業資本と結びついた開発は、絶対に規制すべきである、という意見も多数ありました。

Ⅲ　保留（一七・八％　四六人）

1　十分な資料がなく判断できない。（二六人）

2　各部門よりさらに検討し、結論を急ぐべきでない。（二三人）

保留意見は、基本的には国立公園内の道路建設には反対であるが、現地の状況を知らないとする保留意見と、各地の破壊の状況を調査し、破壊された自然は永久に戻らないことをよく認識したうえで論議し、結論は急ぐべきでないとする意見でした。また、開発局に技術的内容の公表と現在破壊された地域の修復をさせ、その結果を見たうえで論議しても遅くないとする意見もありました。

以上のように、大多数の会員の方のご意見は道路建設に反対するものでありましたが、もっとも問題となると考えられたことは、道路建設に賛成する意見の多くが無記名であったことです。これらの人達は、大雪の自然の価値に対する位置づけの認識が不足していること、産業開発も非常に狭い視野での利益の追求を考えていて、自然保護全体の問題意識が欠けているように思われました。

このことは広い視野に立って自然保護の立場から、都市近郊の緑地からレジャーランドとして利用しながら保護してゆく自然、未開の自然として完全に将来に向けて保存すべき自然を学識者が検討して区分し、公表して皆で守っていくことが急務であることを示すものと考えられたわけです。また同時に、これら山村地域に対して、なんらかの新しい行政的施策の必要性が示されていましたが、これには過疎化が国家的産業構造からくるもので、一本の道路建設とはまったく無関係であることの認識が必要であり、その意味からこの道路は、税金の無駄使いになるとする意見があったことも、注目しなければいけないと思います。

また行政機関の上部で真の自然保護とは何か、動物として人間の生活環境をどう考えるかという点からこの問題も再検討する必要があるのではないか、という意見がありました。

（札幌市）

ブラキストン線の意味するもの

小川巌

本州と北海道を隔てる津軽海峡に、生物地理学上名高いブラキストン線が引かれているのは、誰でも知っていることであろう。この線は幕末の頃、函館に移り住んで貿易業に徒事するかたわら、鳥類の採集などを精力的に行なったイギリスの軍人であり、動物学者でもあるT・ブラキストンに由来していることはあまりにも有名である。

彼は本州と北海道を結ぶ拠点に位置する函館に住むことによって、海峡をはさんで両地域の動物相——とくに鳥類、哺乳類が異なることに着目して、この生物境界線を提唱した。確かに、本道にはヒグマ、本州にはツキノワグマが分布していることに代表されるように、両者の生物相はかなり異なっている。その後の調査で、ブラキストン線の評価は後退を余儀なくされたが、宗谷海峡に引かれた八田線などとならんで、わが国の代表的な生物境界線であることは間違いなさそうだ。

さて、生物の間で問題にされるブラキストン線をわざわざひき合いに出したのは、変ないい方になるが、じつは人間の世界（とりわけ北海道民の間）にも、目に見えないブラキストン線が引かれているのではないか、と痛感するからである。これは何も北海道には先住民族たるアイヌが住み、本州にはシャモ（和人）が住んでいたなどという人類学的、あるいは民族学的な見解に由来しているのでないことはもちろんである。

たとえば立場を変えて、東京周辺に住む人間が、北海道をどう感じとっているかについて考えてみればよい。東京から北海道の玄関口たる函館まで、千キロ足らず、それに対して、九州の入口・北九州までは優に千キロを越すのに、実感としては北海道のほうが遥かに遠いと感ずるのは、必ずしも交通手段の遅速に関係するものではあるまい。かつて、和人の渡島をきびしいものにしてきた海峡のもつ重みがこの実感の差となって現われると考えられないだろうか。

明治以後つづいた北海道への人口流入はそれだけでも民族の大（？）移動といえる規模だったかも知れない。その頃の津軽海峡は、〃生物境界線〃として北海道民にとって、文字どおりの障壁になっていたと言っても言い過ぎにはなるまい。いわば、地理的な意味でのブラキストン線の存在と言ってもよいだろう。

世相移り、交通手段の格段に発達した今日といえども、北海道の人はよく、本州から帰って青森を離れるとホッとするという。これほど北海道人の心情を、的確に表現しているものも少ないだろう。これ自体は、本州のせちがらい人情（と北海道の人は思っている）とか、こせこせした町並みにはないよさを自認している証拠なのだから、非難するにはおよぶまい。

けれども、この傾向が度を過ごすとどうなるか。地理的、歴史的、そしてまた、風土的な特異性をよりどころとした北海道の独自性を主張する考えと発展して、これまで外からの力で開けられてきた〃生物境界線〃を内から閉じていこうとする。〃自閉症〃的な主張に結びつきやすい。

自然、あるいは自然保護の問題に限ってみても、この考え方は、北海道に本州にはない（失われた）手つかずの自然がまだまだ残っているという、過信へ直結する危険性を伴うことを忘れてはならない。自然がまだ残っている、まだあるのだと思って気のついたときは、もうすっから台なしになっていたという事例は、本州においてとっくの昔にイヤというほど経験済みであり、遅ればせながら北海道にもその奔流がおよんでいるというのが実情であろう。

「北海道は、本州にはないものが満ち満ちている」と気負うのは禁物である。開道以来百年間の人間の流れはいうにおよばず、あらゆるものが北海道へ流れこんできた歴史を改めて思い起こすとき、まずわれわれ北海道に住む者の深層に根ざしているブラキストン線をたち切って、本州との同一線上に北海道を位置づける考え方が不可欠なのではないだろうか。

詩の都とか、エルムの都とか謳われてきた札幌に、地下商店街が完成し、地下鉄が開通するまでにいたった経緯は象徴的である。今日、この街のどこに北海道都としての特色が見出せるというのだろうか。これまで目に見えない形で厳然と存在していたブラキストン線は、たとえてみれば、〃全透膜〃ではなくて〃半透膜〃みたいなものであったのかも知れない。

（札幌市）